

# A B C に H を加味して

## — 歴史家とパソコン —

近藤 和彦

### 1

たいていの歴史研究者には、次のようないくつかの傾向（あるいは要素）が、濃淡おりなして共存しているのではないだろうか。さしあたりは、血液型や星座との相関性はなさそうだが。

A型：どこかで発掘したか遭遇した史料を大事にかかえこんで、それ（だけ）をメシの糧に 何年も何十年も研究者としての生命を維持する アーキヴィストのタイプ。もっとも短期的には、修士論文の時点で — 大航海時代の冒険商人か、帝国主義時代の探検家よろしく — めざす外国の文書館に探査・掠奪旅行に出かけ、コピーかフィルムの形でもちかえった宝物をもとに、先端的な論文をしあげるケースがある。

B型：ふだんから新着雑誌や最新の書物に目を通すことにおさおさ怠りなく、客観的なサーヴェイにもとづいて、バランスのとれた仕事をつづけるタイプ。ブッキッシュな人となり研究スタイルにも現われているのだろうか。

D型：論争をふっかけるのが生きがいになっているタイプ。これは ひとところにくらべると、現今、問題意識の多様化と情報の増大にともなって、勢いを失ったといえるかもしれない。

P型：プロパガンダ先行のタイプ。かつての日本もそうだったし、現在の発展途上国でもそうだが、歴史学は国民の運命をになう国家学ないし革命学であり、諸学の脊椎のごとき意味をもった。こうしたP型にとっては、歴史学が実学であることは疑いをいれず、何のために研究するのかということが常に厳しく問われる。

これらに加えて、1970年代ころからC型が登場してきたように思われる。これはもともとコピーを貯めこむことに執心して、読むか読まないかは問わないコピーホルダーのことを指していた。かつての愛書家・蔵書家（真正の freeholder?）の学生版・大衆版とも考えられる。ところが、これは 80年代の後半から意味が変わって、いまやコンピュータの前にすわりこんで 恋人よりも配偶者よりも機械を愛する オタク族のことを指している。

なんだか皮肉な口調になってきたが、いずれも それぞれ立派なタイプ／傾向である。ただし 単独ではいささか単細胞すぎて、ちょっと困ることもありそうだ。ふつうは いくつかの複合型として現象し、いうまでもなく A B型は歴史研究者の優等生とされる。ひところのB D型やD P型は威勢がよかった。わたしの趣味からいえば、どの型であれ 人文主義的な 色香のかおるHタイプ、その複合型が望ましいように思う。

さて、『クリオ』第5号にのった「〈座談会〉歴史学におけるコンピュータ利用 — 天道 是か非か —」は、多くの問題を呈示した座談会記録だった。しかしまた、そこにおける（ABC型の？）発言とわたしの考えとのズレも認識せざるをえなかった。ここでは、ワープロないしコンピュータを日常的に使っている一人として、わたしの所感めいたことを、整理のないまま すこし記してみたい。おのずから 世代や研究スタイルの違いも あらわになることだろう。

## 2

個人的ワープロ歴を明らかにしておく、1986年夏以来だから、ほぼ6年になる。その間、文豪ミニ5のシリーズのEからHDまで 計4台を愛用し 酷使したが、このシリーズがRに改悪されてからは、1年以上にわたって、いろいろ悩み検討した結果、91年末から PC-9801DA/U2 に「松 Ver.5」や '*WordPerfect 5.1*' といったソフトをのせて使うことにした（92年にはいって固定ディスクを内蔵させた）。

ワープロ専用機からパソコンへの転換は、人によってさまざまな反応を呼びおこすようだが、わたしの場合は、文豪ミニが良かったぶん、好悪あい半ばする。『クリオ』の前号の座談会では ワープロ専用機の旗色は悪かったが、その発言者たちは よほどひどい専用機を使っていたのだろうか？ それとも 使いこなしてなかったのだろうか？ わたしはいま「松」をきわめて快調に使っているが、それでも逆に旧機ミニ5HDがいかに使い勝手がよく、イージーで かつ優れた小機械だったか 再認識している（もちろんユーザ辞書をフルに利用していた。— その分、ミニ5Rは実にのんびりして ユーザを小バカにした機械ではないか）。ではなぜ愛用していたミニ5から戦略転換したのか といえば、それは内部容量（CPU）の小ささと印刷の遅さ（これだけは我慢の限界だった）、そろそろ液晶画面の寿命が近づいていたこと、NECの最近のワープロ開発政策に多少の不信感のあったこと、そしてやがてデータ処理をしたいという中期計画をもっているからであった。

専用機にくらべて パソコンの欠点といえば、第1に 電源の保全に最大限の注意をはらわねばならないこと、第2に 起動するまでに（したがって 終了時にも）儀礼が必要なことにつきる。電源を入れてから実際に文章を入力しはじめるまで、何度キーを押すだろう。ミニ5ならスイッチを入れて直ちに 昨日 途中まで書いた文章に取りかかれたのに、こちらでは電源を入れてから、バッチ処理の動作を見守ったあげく、「松」をえらんで 初期メニューから「新規」ないし「校正」の画面にはいるまでに 30秒はかかる。そして、もしソフトを切り替えると、当然のように印刷設定の切り替えも必要で（プリンタの DIPスイッチも）、とくに縦書きの場合は、こちらの望みどおりの書式にしあげるまでに、何度 試行錯誤が必要なことか！

機械の高度性への拝跪、これが一番けしからんことではないか。誰もが一度は手にし

た『入門／実用／応用 MS-DOS』（アスキー出版局）の著者、村瀬康治の「一太郎しか使わないユーザは、パソコン・ユーザとはいえない」とか「メニューでなくコマンドを覚えよ」という発言姿勢に現われているように、パソコン業界とユーザ市場は機械好きのオタクたち支配されている。あたかもパソコンが主人で、こちらは謙虚にその指令にしたがうほかない奉公人か、忠良なる奴隷のごとし。本来、パソコンは道具ないしアシスタントで、こちらが主人ではなかったのか！ コマンドを下すのは人であって、逆に人がパソコンないしソフトに指令されてはならない、とわたしは信じる。

しかし、現在 こういった類の発言をする人は パソコンもワープロも大嫌い／恐いという高踏派（？）知識人だったりして、いささかでもパソコンを使いこなしたいと考えている人々は、概して機械にたいして謙虚だ。すすんでパソコン明神に拝跪するしかないと諦めている人もいるだろう。コンピュータにたいする人の主体性にこだわり、これを知的ツールとして従属・隷属させ、その能力を搾取しつくしたい、という者はまだ少数派である。そもそも、スイッチを入れるときに「さあ、いよいよ」と身構えるようではよくない。少なくとも 7・8年前に 紙とペンを手にして書いていたころと同じだけ、臨機応変に、イーザーに文章を書き、推敲でき、また印刷できるべきなのだ。なぜならわたしたちはパソコン・オタクではなく、他にしなくちゃならんこと、考えなくちゃならんことを一杯かかえた フツウの人なのだから。MS-DOS でコマンドを入力したのに「コマンドまたはファイル名が違います」というメッセージに迎えられて、不愉快な思いをした人は多いはずだ（パソコン・ユーザのほとんど全員？）。こちらの落度といえば、せいぜい 'chkdsk' と書くべきところを 'chkdisk' と入力してしまった — なぜなら diskcopy というコマンドもあるので — 、あるいは余計なスペースを入れてしまった、といった程度の「間違い」にすぎないのに！

1992年の日本では、わたしの知るかぎり、歴史家で旺盛に、かつ読ませる仕事をしている人は 手書き派かワープロ派である。パソコンを駆使している人は 例外なくこれを欧文や統計の処理につかっている、日本語文の作成は副次的なようだ。ただし、80年代の初めからパソコンを駆使して 読ませる本を書いた友人がいるが、彼は 経済学者である。ちなみに『Asahiパソコン』に連載された『俵万智のハイテク日記』（のちに朝日新聞社刊）でも、結局 著者は、編集部の思惑からはずれて、日常的には パソコンでなくワープロ専用機（オアシス）を愛用することになってしまったのではないか。日本語で文章を書く人には、今のところ どうしてもワープロ専用機のほうが簡便なのである<sup>(1)</sup>。

以上に記したことは、しかし、電源保全を別にすると、パソコンそのものへの不満というより、正確にはむしろ NECなどの準拠している MS-DOS 3.3 という operating system にたいする不満・憤りなのかも知れない。いずれ MS-DOS 5 や WINDOWS 3 がふつうのアプリケーション・ソフトに用いられるようになれば、はるかに改善されるだろう（そうでなくては困る）。なお、user-friendly という点では、評判の Apple社のマ

ックがある。わたしはほんの少しいたずらしてみただけだが、とてもいい印象をうけた（使用説明書など いっさい見なくても 快適に使えた）。ただ、わたしがワープロを使いはじめた1986年の日本で Macintosh がこれだけ安く、日本語についても 使いやすくなるとは、だれも予想しなかったのではないか。— いうまでもなく、そのハードとソフトに周囲の友人たちがなじんでいるかどうかは、パソコンを選択するさいのもう一つの重要な判断基準である。つくづく思うが、個人ユーザにとってパソコンの購入は結婚のようなもので、途中で他種に乗り換えるのは、たいへんなエネルギーとコストを要する。教訓といえば、十分に交際したうえで結婚しましょう、ということだろうか。

なお、念のために付け加えると、わたしが使っている「松 Ver.5」は導入の最初の週には周囲のみなさんを騒がせ、迷惑をかけてしまったが（I氏、Y氏には深謝いたします）、今ではとても気に入っている。こちらの好みとクセにあわせて容易にカスタマイズできるし、さらにはローマ字で「VC」と入力すると‘ヴィクトリア朝’に変換し、「かまS」と入力すると‘Cambridge, Mass.’になる といった辞書登録までも許す その度量には恐れいつている。

### 3

座談会でひとしきり話題になったことのうち、とくに次の二つは個人的に取りくむだけでは解決の見えてこない課題で、ぜひ社会的に積極的に取りくまなくてはならない。というのは、1)データベース、2)研究補助員（技術協力者）のことである。日本の人文学の将来にかかわる重大問題で、カネと場所のからむことだが、あらゆる機会に色々なレベルで要求し、ぜひ推進してゆかなくてはならない。せめて理工学・医学の半分でも諸条件がどとのうなら……、前途は安泰ではないが、しかし暗黒でもない。

なおこの座談会では、情報の蓄積・共同利用という問題とコンピュータの威力という元来は別の問題が 一緒にされがちで、そのため すでに蓄積されてきた情報システムをやや軽視する（？）傾向もあつたように思われる。たとえば、イギリスのNRA（全国史料登録）や議会史財団のように、コンピュータ化される以前からその有用性が認識され、いまではコンピュータ化により、ほとんど無限の価値をもつことになったデータベースには言及がなかった。ESTC（18世紀書目カタログ）をはじめとする近世以降の英語出版物の世界的な書誌データベースにも触れられてない<sup>(2)</sup>。さらには 時間を無限にもっているわけではないわれわれが 学問でなにを優先するか という問いにも、あらためて迫られている。かつて18世紀のプロソポグラフィにとり憑かれて、カードがこんなに貯まったと 自慢げに苦勞話をするばかりで 議論がなかなか先に進まないわたしをみかねて、ついにある日、ケインブリッジの Gatrell先生は言ったものだ。「そういう仕事はひとを夢中にさせるし、もちろん論文の前提だが、しかし 大事なのは それで何が明らかになるか、きみの argument だよ。」

いまや問題は、コンピュータを使うかどうか（Y/N）ではなく、どう使うか（how）であろう。今日の知的生活は コンピュータなしにやっていけないようになってしまった。同時に、まだ公然とは問題化していないが、半導体チップなどを生産する超精密工業によって、いま 電磁波障害だけでなく、水汚染をはじめ かなりの環境破壊が潜伏進行していることも見逃してはならないだろう。16ビットから32ビットへの転換、ディスクの高密度化、液晶の改良をはじめとするダウン・サイジングも、地球へのリスクを犯しながら進んでいるのである。こうした認識にたつて、わたしたちはどのような研究と生活のスタイルを選択してゆくのか — 。知るべきこと、考えるべきことは多い。

(1) ここで、大事なことを付記しておきたい。このところワープロ/パソコンで印字された、ひとの原稿を読む機会がたいへん多いが、おそらくその文書について一度目の（最初で最後の）印字原稿とおぼしき場合も少なくない。たいていそれは、行間が詰まりすぎていたり、脱字や繰り返し（消し忘れ）がめだち、むやみに漢字がおおく、さらに縦書き原稿だと、句読点やアルファベットが 90度ひっくり返っていたりして、かなりミジメな「完成原稿」なのである。インクやリボンをケチらず、何度も紙に印字して、ひとの校正ゲラを読むような気もちで読みなおし 手を入れる。— これがワープロ/パソコンで仕事をする者の基本であり、また特権ではないだろうか。さきほどの経済学の友人も、パソコン画面だけで書いているのではない。むしろパソコンはメモの段階から下書きにつかい、ハードコピーで推敲・校正する、その作業を何十回もくりかえしているという（もちろん、光沢のあるいわゆるワープロ用紙は使わず、普通紙の表裏に 計2度 印字する）。人は今のところ、紙に書かれた黒い文字を読み考えるほうが、画面に電子的に表示された文字を読み考えるよりも 得意なようだ。

(2) 「イギリスの古文書保存制度と吾が国の公文書問題」『史学雑誌』75-4（1966）；  
「18世紀マンチェスター社会史 — 関係史料をどう探すか」『史学雑誌』91-12（1982）；  
「NRA, ESTCの刊行物と18世紀関連書誌目録」『イギリス史研究』第34号（1983）；  
「ネイミアの生涯と歴史学」『英国をみる』（リプロポート、1991）。

（こんどう かずひこ・東京大学文学部・イギリス近代史）